

会員の広場

アメリカのデモクラシー

瀧口 勝行（東京）

旧体制の階級規範から解放された人間は、自立した個人としての自由を得たが、一方で人々の間の社会的政治理的な紐帯は希薄になつた。また公平を求める社会では社会統合の中枢として一定の権力集中が不可避となり、「バラバラになつた人民とそれをリードする孤高の中央権力」という新たな社会関係が生まれる。その中でデモクラシーは、放置すれば「無政府へ向かう道」か「隸従へ向かう道」という迷路に陥るとされる。

このように指摘したうえで、トクヴィルは、アメリカには、デモクラシーの独裁化を防ぐためにいくつかの装置が意識的に埋め込まれていることに注目した。その装置とは、徹底した地方自治、司法での陪審員制度、そして

由・平等・博愛」を価値軸とする近代社会は、政治体制として民主主義によつてのみ成立する、というのが現代まで疑うことなき通念だつた。「自由と民主主義」を旗印に戦後秩序を支えて来たアメリカは、本当に変質してしまつたのか、そしてそれはなぜなのか。

十九世紀フランスの思想家・歴史家そして法律家でもあつたトクヴィルは、若き日に長期間アメリカに滞在し、当時のアメリカ民主主義の状況をつぶさに観察して『アメリカのデモクラシー』を著わした。その中で、トクヴィルは、自由と平等を求める社会には権力集中が進む要因が内在していることを指摘し、当時のアメリカをモデルに民主主義の独裁政治化をいかに防ぐかを論じた。



結社（association）と呼ばれる多様な中間団体の存在である。アメリカには統治の集権化はあるが、個々の行政は自立したユニットに権限が分散されており、これらの装置が「自由の避難所」となつてゐること、またそれはマイノリティの権利を保護する力を持ち、人々が「共同の利益」に順応し「市民精神」を涵養する場として機能していると考えた。

アメリカの民主主義はこのまま独裁への道を歩むのだろうか、それとも「埋め込まれた装置」が民主主義の再興に向けて復元力を發揮するのだろうか。トクヴィルの指摘は、時代や地域を超えて、わが国を含むすべての民主主義国が強い警鐘として受けとめるべきものであろう。